第１回　自律的移動支援プロジェクト推進委員会
議事概要

１．日　時：平成 16 年 3 月 24 日（水）　15:00～17:00
２．場　所：ホテル・ラフォーレ東京「松月の間」
３．議事次第

１．開　会
２．挨拶
（１）国土交通省技監　大石 久和
（２）委員長　　坂村 健
３．議　事
（１）「自律的移動支援プロジェクト」の進め方
（２）「ユニバーサル社会」における自律的移動のイメージ
（３）今後の進め方
４．その他
５．閉　会

４．議　事

１．プロジェクトの目的・体制に関して

・ 国土交通省においては、道路、駅、建築物など様々なものについてバリアフリー施策を進めてきたが、個人として自律的に移動できるということから言うと、バリアフリーからユニバーサルへの転換が必要。
・ 国土交通省発足後３年が経過、交通に関してソフト部門とハード部門が完全に一体となった。この委員会をサポートする省内体制についても、ユニバーサルな社会を構築していくための第一歩ということで、省を挙げて取り組んでいく。石原国土交通大臣も本プロジェクトに大変強い関心と大きな期待をお持ち。
・ 我が国が世界に最初に発信する新しい提案である。単なる東京の議論だけではなくて、具体的な実践が伴うことが必要。
・ 障害をお持ちの方や高齢の方に対してどういう支援ができるのかというようなことは、国を挙げて取り組むべき重要な問題。
・ 特定の人のための特別な機能を開発するのではなく、あらゆる人に役に立つ機能として技術開発していくことが、結果としては障害をお持ちの方にとって非常に役に立つ技術開発ができる。
・ 安全・安心をサポートするとか、高齢者の方やあらゆる障害をお持ちの方を含めたあらゆる人にとって役に立つ技術支援をするためにこのＩＴを使っていくということは、現在、世界に置かれた日本の立場を考えた場合、理にかなっている。
・ 「ｅ－Ｊａｐａｎ２」にもあるように、世界最強のＩＴ国家になるという具体的な例としてこれほど最適なものはない。世界に対して貢献していくことができれば、この委員会として

の大きな目標を達成できたと言える。

- 阪神・淡路大震災から１０年等々のタイミングを考えても、非常にタイムリーなプロジェクト。
- 自律的に移動するというのは、大げさに言うと個人の尊厳にかかわるような重大な問題。本当の意味で自律的な移動ができる社会づくりが必要。
- 小さな取り組みを社会全体に広げようと思うと、やはり日本の国がそういったことの方向性をまず持っていただくことと、ＩＴに関わるすべての皆さん方がその技術を、人が人の力を発揮するために使うという方向性をまず見すえていただくことが重要。
- 民の立場の当事者自身が発信する側になって、積極的に社会に対して自分たちのできることを出していこうという意思を持つことも重要。
- 日本で開発されたテレビ携帯電話を使って、分かりやすく説明すれば、札幌にいる視覚障害者の目の前の新聞を沖縄の人が読んであげるという千里眼の原理による福祉テレサポートというものがある。日本で始まった福祉技術だから、そのノウハウを確立し日本から世界に発信しなければいけない。
- システムができる過程において、端末とタグなどを含めて、ここまでできたんですけどこれでどうなんですかということを互いに確認しながら進めていただけると、より良いものになるのではないか。
- ユニバーサルの考え方になると、ここを改善することによってその人がどんな行動が起こせるかというところまで考える。その人の力が世の中に出せる方向まで持っていかないと、バリアフリーからユニバーサルへは行かない。
- 安全で不安のない社会であって初めて人が出ていき、経済が活性化する。
- 何か困っている人たちのためにこのプロジェクトが始まったのだというふうには絶対思わないでいただきたい。その人が生産者になり、消費者になり、引いてはそのビジネスとして提供される側の方の新たなビジネス展開もできる。
- このような委員会が発足するということを高知県でお話ししたら、非常に興味を持っておられた。地方都市になると、その地域に障害者の方も含めてまちづくりをしたいとか、村おこしをしたいなどの非常に明確な意識がある。ほかの都市の方もお呼びして、そういうニーズも含めて吸い上げていくという各都市参加型の仕組みというのが大事。
- 省と省の間がぽっかりあいて改善されないというふうな状態をよく経験する。できるだけ、境のところは両方から手を出していただいて、積極的にそこの部分を解消する方向で取り組んでいただきたい。

２．検討すべき事項について

(1)インフラの検討（ハード、ソフト）

- 技術開発だけでなく、運用の方法、セキュリティーの問題、プライバシーの保護、また、これを国土全部にわたり適用していく場合、どういう問題があるのかというようなことに対して答を出したい。
- ３つポイントがある。１つは、法制度を含めた物理的な整備。次に、福祉、あるいは交通事業者の皆さんの制度やサービス。最後に、情報をきちんと的確に伝えること。

(2)技術的な検討

- 本プロジェクトの技術と同じような機器のつくり方で、車が来ることを歩行者に知らせるような仕組みというのは出来る。車と歩行者を区別するコード体系を早めに構成しておくということが必要。車を含めた機器の開発の仕組みを頭に入れておいていただければ、今後の展開がスムーズになる。
- テレビ携帯電話を兼ねたいわゆるユビキタスフォンというのが、福祉テレサポートを含めたユビキタス社会における端末のイメージ。
- 視覚障害者が端末を音声で利用するためにヘッドフォンで耳をふさいでしまっては周辺環境の音による情報が取れなくなってしまう場合もある。そこで、非常に優れた骨伝導のヘッドホンを使えるようにして、鼓膜による通常の耳、聴覚も使えて、なおかつ骨伝導で聴覚のチャンネルを増やして情報が入るようにしていただきたい。

(3)ニーズの把握とサービス検討

- 携帯する端末は、金融機関のキャッシュコーナーでも、家庭でも、学校でも、どこでも同じものが使えなければ困るので、交通などの移動だけでなく、国民生活ということであらゆる場面に関係するので、どこでも使えるものにする。
- 私は日常において、多く大江戸線を使って六本木で日比谷線に乗りかえるが、エスカレーターへは誘導ブロック（点字ブロック）の案内は敷かれていない。この乗り替えにはエスカレーターを６回使わなければならない。階段の段数は 250 段以上である。高齢で視覚障害者である私が、このエスカレーターを使えず、階段を利用しなければならないのは酷である。六本木駅は、視覚障害者がエスカレーターを使えるようにしなければならない最も分かりやすい一例なのである。エスカレーターには、階段の手すりにあるどの方面に行くかの点字の案内もない。これからは、エスカレーターが駅に多数敷設されるようになり、エスカレーターへの誘導がないために、階段を探して遠くまで歩いているうちにホームから転落することも多くなるものと考えられる。これまでの、視覚障害者をエスカレーターに案内しない鉄道会社などの方針は間違いであった。今度のプロジェクトで視覚障害者がエスカレーターも使えるようなシステムにしていただきたい。
- 聞こえない場合は移動に関しては何も問題がないというふうに考えておられる方が多いと思うが、例えば国電なんかを利用していて事故で電車がとまってしまった場合に、どうしてとまったのか理由がわからない、いつごろ動き始めるのかわからない、どういうふうにして乗り継ぐとか、ほかの交通機関を使えばいいのかという情報も入らない。駅員もほかの人の対応で右往左往していてとてもつかまらない。
- また聞こえない場合、歩道と車道の区別のない道で後ろから車が来ても分からず、怖い思いをしたり、ドライバーに迷惑をかけたりする問題がある。
- 目が見えてるから、ドライビングに関しては同じだろうと思っていたが、聴覚障害の方は相当なストレスがあって人に伺わなきゃいけないので、認知地図が確実でわかるものしか頭の中に入れないという訓練をされている。地図表示には、聴覚の障害がある方には工夫が必要。
- 取り組み方にはやはりプライオリティーがある。一番重要なことは命にかかわる問題。人の

命を救うシステムを考えることで、自然災害とか、テロといった緊急事態の中で、私たち障害者や高齢者を含めて、すべての人を可能な限り安全に守るという問題にも繋がる。

・ 同じ障害を持っていても、その人のライフスタイルや、背景や、障害の程度や、バックグラウンド、言葉の力、その他いろんなことがあって、多分思いもよらないニーズがたくさんある。簡単にアンケートを取ったり、例えばどこかの障害者団体のリーダーに尋ねたぐらいでは出てこない。声なき声を聞くということ、外に出られない、出るのは怖いと思っているような人のニーズこそ聞くことが重要。

３．留意事項について

(1)他のプロジェクト・活動との調整

・ 兵庫県は平成４年に福祉のまちづくり条例をつくり、福祉のまちづくりを積極的に進めてきた。最近ではバリアフリー地図が、４市でおおむね形ができている。

・ ユニバーサルデザインにいては、神戸の震災後のまちづくりの基本的な方向として取り組んできた。昨年の５月から市民、事業者、神戸市による神戸ユニバーサルデザイン広場を立ち上げ、幅広く市民、事業者、ＮＰＯの方々に参加をいただいて推進している。

・ 平成１７年の８月には「チャレンジド・ジャパン・フォーラム」をメインに、第３回のユニバーサルデザイン全国大会を神戸で開催予定。事業は既に始まっており、本プロジェクトの考えを取り入れるため、今後、スケジュールの調整についてぜひお願いしたい。

(2)プロジェクトの将来性

・ すべて官が悪くて、何か民間だけでやればうまくいくみたいというのは絶対間違いで、産官学民すべての人が今こそ協力して、これからの日本をどうつくっていくかが重要。

・ すべての情報を障害をお持ちの方々に最後の最後までお伝えして自由に動き回るという形をつくるには、バリアフリーの取り組みに加え、今回のようなシステムが不可欠。

・ 実験だけに終わらないように、全国展開のための実験としての位置づけが揺るがないように、ぜひお願いしたい。

・ 視覚障害者には、足の感覚で分かる点字ブロックなどは凸面がはっきりしていた方がよい。一方で車いす使用者などは、できるだけ道路には凸面がなく滑らかな方がよい。このように違う障害者との間にはバリアについての相反する面のあることを理解しなければならない。このようなことについて、ユビキタス・コミュニケーターや埋め込みのチップを使ったこのシステムが、障害者と障害者の間のバリアを解消するということに大きく貢献する可能性がある

・ 例えば、こちらは男子トイレ、こちらは女子トイレというようなアナウンスは、関係のない人から見れば、それは一種の騒音であり、必要でない人には聞かせなくて済むということにもこのプロジェクトが貢献出来る。

４．ＷＧの枠組みについて

・ 具体的なことに関しては、委員長に一任をさせていただきたい。

・ 特にＩＴサポーターの方には、ご意見があるなら、いろんなことを決める前にいろいろ言っ

ていただきたい。それこそＩＴを駆使してご意見をいただきたい。

５．今後の予定

・　今後、神戸のプロジェクトチーム、ワーキンググループを立ち上げさせていただき、５月の末から６月の上旬を目途に次回の第２回の委員会を開催させていただきたい。